

「疲れたね

……もうこんな時間なんだ。……ふふ。

毎度ながら、君と過ごす、あつという間だね。

ん……そうだねえ。今日はたくさん歩いたなあ。足がパンパンになっちゃった。

あ、そうそう。君ってば、すぐ息を切らしちゃってさ、運動不足だよー？

……でも、ここまで連れてきてくれて、ありがとう。疲れたでしょ？

よしよし……。君のおかげで私、色んな景色を見られて嬉しいよ。

へへ。君とふたりで歩いてるとき、カメラは必要ないんだなって思っちゃった。

だって、歩いて見た景色が、頭の中にずっと残ってるもん。

もうあれだね、私の目がシャッターみたいなものだね。えへへ。

……とか言いつつも、スマホの中、今日の写真だけですごい量だ……。

う。……それとこれとはね、話が別なのですよ。ほら、何と言うか、

頭の中のアルバムと、空色スマホのアルバム、ダブルで幸せ……みたいなね。

あつ出たその目！ 絶対バカにしてる！ なにさ、なにさっ。

うううう……もう知らないっ。おばかっ。

む……、まーたそういう……、頭撫でたって無駄でーす。

私は君のペットじゃないんだよ？ そんなさ、やさしい手つきで撫でたって、

私がふわふわになっちゃうわけ——えへへへ。……うるさいよ。

君、少しお喋りが過ぎます。……こら、このタイミングで浴衣を褒めない。

……嬉しいけどさ……！ 今日だけで二十三回目だよ、それ。

まったく。……あれ？ でも、ちよつと眠そうな顔してるね？ ふふっ。

ん？ あ、……その、私はちよつと、えへへ……。

君とふたりで旅行って夢が叶って、まだ興奮が収まらないっていうか。

……あつ、違うよ、そういう意味じゃないよ。……ふふん。

先に言っとかないと、

どうせまた邪な発言しそうだから、釘をプッスンしとかないと。

……めっ、だよ？ うふふ。

ほら、明日もたくさん色んなところ、行くんだから。

ちゃんんと力を残しておかないと、ね？ ……うん、えらい。

それじゃあ、そろそろ……うん。あ、私はたぶん寝つけないと思うので、

先に寝ていい——

ふあ。ちよ、い、いま、ダメって言ったばかりじゃんツ。

だめだってば……。わ、私、こうされると断れないの知ってるでしょ……！

……え、うう。……ありがとう。

うひえッ。だ、だからさあ、私の匂いの話はナシ！ 恥ずかしいからッ。

いいよ事細かに説明しなくてっ。こ、こら、髪まで嗅がないッ。

シャンプーかリンスの匂いだってば。そりゃいつもと匂い違うよっ。

……うう、このお……。……ん……。

もー……。……私も大好き。好きだよ。大好き。

でもっ。ほら、もうおやすみしよ。ね？ ……ええっ？

もおっ、勝手に目冴えないでよっ。自業自得ですっ。

……はあ。調子良いなあ君は。仕方ない、……いつもの、やっただげるね。

ん、全然平気だよ？ 眠くないし、君にはたくさん休んでもらいたいもん。

それに私、これするの好きだから……。ふふん、これでも読書家ですから。

こうなるかと思つて、何冊か持ってきたし。えへへ、準備良いでしょ。

あつ。電気は、常夜灯でいいかな？ ——うん。

あと、ごめんね、枕元だけちよつと明るくするよ。ん、ありがと。

はい。目を閉じて、ゆったりゆつくり、集中しなくて良いからさ、うん。

よし。……今日はこれにしようかな……。それじゃあ、読みます。

『歌い鈴

「歌い鈴」

亀鳴く。鳥の巢。風光る。よもぎ。八十八夜。臘月(おぼろづき)。

春。春。季節が走る。生き物。けもの。なにかあたたかいもの。

物静かに、あまりに物静かに。ひんやり、ぽかぽか、昨日とあしたが、

言い争って。ふたつがひとつになったとき、晴れ晴れとした青空に、眠りについてしまえそう。

あなたのところは、まじろみに。変わる季節は足早に、しどろもどろ。もどろうか。それとも、起きましようか。どちらにしたって、時間のなかで。

あなたのところは、雪解け水。ささいな抵抗は捨ててしまおう。焦る春は間違いだよ。さようならは、まだ、遠すぎるから。

あの日もこんな空だった。ささいな決意と夢と希望。

聞こえは良いとは言うけれど。それこそ未来と過去の狭間で。

そよ風さえいつくしむ詩人のように。

雨雲に寄り添うあのひとのように。

いつでも、いつまでも、僕はここにいます。

夕日が昇れば顔を伏せ、朝日の頃に笑うから。そして、旅立ちを。

鈴を片手に歩き出す。懐かしの欠片を口ずさむ歌うたい。歌い鈴。

3. 共鳴した

「共鳴した」

大人げないやもしれませんが、心霊スポット巡りが好きです。

趣味と言うには少々語弊があるけれど、

ふと思いついてはインターネットで有名どころを調べ、車で赴きます。

一人では行きません。だって怖いですから。

幽霊ですか？ 信じていません。だって、見た事がないですから。

どれだけ危険と言われるスポットを歩いて、

影も形もこの視界に現れた事ありません。

生まれてこの方、自分の目で見たものしか信じられない性なのです。

でも、その存在を全否定しているわけではありません。

幽霊に限らず、宇宙人やUMA、都市伝説なるものはロマンがあると思います。

見るも聞くにもわくわくするような話が盛りだくさんです。

そういったものもネットサーフィンで漁り漁り、ついつい熱中し何時間も経っていた、何て事もありますよ。

ただ、その存在を過信し

「いるに決まっているだろう」と決めつけるひとは苦手……

いや、何と言いますか、視野が狭いんだなど。

私は見える、というひともまあ、そうですかと言った感じですけれど、

その真偽は置き、自分に見えないものを視認するそのひとを羨ましくも思います。

地元の小学校時代からの友人の君とは、よく食事やドライブに行く間柄です。

今では住まいも離れ離れ。心霊スポット巡りもたびたび同伴していましたが、

今では滅多に興じなくなりました。

君も幽霊を信じてはいませんが、何故か彼と私が二人で過ごすと、

『そういった場所』でなくとも変な現象が起こる時があります。

いるはずもないひとの気配を二人同時に感じたり、声が聞こえたり、

大抵は「うひゃーこええ」なんて笑いながらすぐに忘れてしまいますが。

まだ君が地元に行った頃。ある夜、散歩に行こうと誘われました。

お互い駄弁り歩く行為が好きなので、そういった誘いは珍しくありませんでした。

二つ返事で待ち合わせ場所へ向かい、さて今日はどこへ行こう、山とかどう

よ、いいねいいね、そんな会話で目的地が決まりました。

山は地元の地名で、とある遊歩道が全国的にも有名な心霊スポットです。と言

っても、やはり地元は地元。馴染みが深すぎて怖さとは無縁の場所でした。

趣味の話で盛り上がりながら歩く夜道。

夏でしたので、背景には虫や蛙の歌声が騒がしかったのを覚えています。

その遊歩道は歩き切るにも五分もかからない場所ですので、ちょちょいと通過し

ようとしたのですが、道が半ばに差し掛かる頃。

途絶えなかった会話が数秒間沈黙しました。

虫の声も蛙の声も、遠くで聞こえていた車の音も、

一切合財サイレント。自分たちの足音すら聞こえず。

世界の時が止まったようでした。

でも、たったひとつだけ。妙な『何か』が背後にいました。

足音だとか話し声ではありません。それこそ気配とでも言いましょうか。沈黙のひとつとき、確かに真後ろに何かが存在していました。

そして、S君か私か、どちらが会話の口火を切ったかは覚えていませんが、再び他愛ない談笑が始まりました。

既に世界の時は動き出していました。

背筋が凍ったような思いでその遊歩道を歩き終えたのち、

S君に言いました。「何か後ろにいなかった？」と。

彼は言いました。

「何でお前も同じ事考えてんだよ」

ぞっとする。という感覚を本当の意味で体感した瞬間やもしれません。

これが当時の私達にはあまりにも不気味で、

夜に思い出せばトイレにも行けない怪談となりました。

音もなく姿形もなく、しかしそれは確かに存在していて、

私達は会話もせずその気配を感じていた。

もう一度言いますが、幽霊を信じてはいません。

ロマンがあります。そういう話は大好きです。

しかし正体不明や原因不明、不思議な話。

それらは怪物や妖怪のように形あるものより、

ずっとずっと怖いものだと思います。

ひとが一番恐れるのは、目には見えない何か、なのでしょう。

まあ、今となつては笑い話で済んでしまうものです。

そんな事もあったね、なんて、恐怖というものはその場近辺の感情で、

時と共に薄らいでいくものなのでしょうね。

♪ナツカシノカケラ

「ナツカシノカケラ」

懐かしい、って感覚。これってさ、不思議なものだよ。

目に見えるようなものではないし、ひとによって、感じ方はバラバラだし、自分の中にしか存在しない……っていうのかな。でも大抵のひとつ、その感覚を、まるで宝物みたいにさ、大事に大事に、心の奥底にしまつてあるんだよね。

自分の住んでる町にさ、ふと懐かしさを感じるこつて、ない？

私は、あるよ。

あの、一際暑かった夏。夏休みから始まつて、夏休みに終わってしまった、不思議な不思議な、特別な思い出。

私の住む町で起きた、誰にも言えない、懐かしいお話。

とある日記帳に刻まれた、小さくて、寂しくて、

でも決して消えることのない……

ナツカシノ、カケラ。

アイ「いつてきまーす！」

アイ「うわっ。今日もあつついなあ……」。

そういえばさつき、天気予報で三十五度とか言つてたつけ。

八月にもなつてないのに、ありえない気温だよ。

……ぼやぼやしてたら熱にやられちゃいそうだし、もう、走っていこ」

私の名前は波多瀬アイカ。あくびが出ちゃうほどの田舎町、

鴨田山町に住む、ふつうの高校二年生。

……ふつうとしか言いようがないから、ふつうって言つたけれど、

強いて特徴を挙げると、ポジティブさだけは、

人一倍にあるつてところかな！ それもふつうか。あはははっ。

ところで、今日は何と、夏休み初日なのです。

子供の頃だけに許される晴れやかな長期休暇、そのいっちゃん最初に、

私は何をしているかという、ふふ、それはね。

毎朝欠かさずに行ってる、地元の桔梗神社への参拝です！

それだけは、小学生の頃からずーっとサボったことがなくて、
ちょっとした自慢なんだ。

桔梗神社には、桔梗様っていう女性の神様がいて、

彼女は鴨田山町の守り神なの。その力は結構強くてね、

たとえば私の高校受験の日なんか、日が昇る前から拝んで、
空にも拝みまくって！ 見事に合格を勝ち取ったんだ！

えへ。すごい神様だね。

さてさて、とっとと行きますかー！

ついたついた。今日も立派な佇まいですなあ、桔梗様！

さ、今日もちゃんと持ってきたよお？

ふふふ。じゃーん！ お賽銭、一円玉！

一円玉って、いつもたくさんお財布に残ってるよね。

毎日ジャラジャラお賽銭箱に入れられたら、桔梗様も喜ぶだろうなあ。

アイ「今日も一日、鴨田山を守ってください、桔梗様……！」

コウ「ふふ。仰せの通りに」

アイ「えっ？ わあっ！」

コウ「あつ。驚かせちゃった？ ごめんなさい」

アイ「……わああ。すっごい、綺麗……」

コウ「へっ？」

アイ「ま、まさかモデルさんですかっ？ 見慣れない制服だけど！」

コウ「ち、違います！ 私、この神社の巫女です。立花コウっていいます」

アイ「へえ、巫女さんなんだ。コウちゃん……名前も綺麗だね」

コウ「うえっ。あ、ありがとう。……あなたの名前は？」

アイ「波多瀬アイカだよ。アイって、名前で呼んでくれると嬉しいな」

コウ「え、ええと……アイ、ちゃん……？」

アイ「うんうん！ コウちゃん♪」

コウ「……何だか恥ずかしい」

アイ「あっはは！ 可愛いー！」

コウ「も、もう！」

アイ「ところで、今日はどうしてここに？ 私いつもこの時間に来るんだけど、

巫女さん見たの初めてなんだよ」

コウ「……その前に、ひとつ、質問に答えてくれる？」

アイ「へ？ うん、いいよ」

コウ「アイちゃんは、さ。このこと、どう思ってる？」

アイ「ここって、桔梗神社のこと？ ……どうって？」

コウ「ん、と。好きとか、嫌いとか」

アイ「そりゃあもちろん、大好きだよ。雨の日も雪の日も、毎日参拝してるんだから！

そもそもね、この鴨田山町が大好きなの。温かくて、どこか懐かしくて、ふふ、おかしいよね。ずっと住んでるだけで、特に何かあったわけでもないのにさあ。

それでさ、ここって、鴨田山町を見下ろせるんだよね。

まるで自分が桔梗様になって、守り神として街を見守ってるような、不思議な感覚になれるんだ」

コウ「……そっか。じゃあアイちゃんには、

すごく辛いことを伝えなきゃいけないね……」

アイ「ふえ。どういうこと？」

コウ「桔梗神社ね、この夏に解体されるの」

アイ「……へ」

コウ「私も、詳しくは知らないんだけどね。

神主さんの希望で、取り壊しが決定したんだ」

アイ「えっ……ええええええええっ——」

コウ「だ、大丈夫？」

アイ「……ダイジョウブじゃない」

コウ「うう、元気出して……」

あの、さっきの質問に答えるけど、私、本殿の掃除をしに朝早く来て、いま帰るところだったんだ。

そこに丁度あなたが来て……こうして、初めて出会えたの。

運命って言葉は、安っぽいから好きじゃないけど、これって、とっても素敵な出来事のような気がする」

アイ「……うん、そうだね。私も、コウちゃんに会えて嬉しかった。

ここに來るときは、いつもひとりぼっちだったからねー」

コウ「ふふ。毎日、毎日、参拝してくれてるんだもんね。

そんなアイちゃんに、私からご褒美をあげちゃいましょう。はいっ」

アイ「んん？ なに、これ？ 随分と古い本だね……？」

コウ「桔梗様のつけていた日記帳っていわれてるの。

中身はぼろぼろで読めないけど、

でも、アイちゃんに持っていてほしいんだ」

アイ「ええっ！ そ、それって何か、家宝？ っていうか、

物凄くありがたーいモノなんじゃないの？

私なんかがもらっちゃって、大丈夫？ 何か恐れ多いよおお」

コウ「これは、桔梗神社を誰よりも愛してるアイちゃんにこそ相応しいモノ。できれば、ずっと持っていてもらいたいな……」

アイ「う、うう……そこまで言うのなら……ありがたく頂戴します」

アイ「うっ……？」

何？ 何々？ おかしいよ、この感じ。

何だか、視界が明るくなったような。世界に見える色が増えたような。

景色が鮮やかになったような、何？ 何なのこれ？

コウ「アイちゃん、どうかした？」

アイ「……えっ？ あっ、ううん、何でもない」

コウ「大事に持っていてね。約束だからね」

アイ「分かった。ありがとう……」

コウ「どういたしまして。ねえ。また、明日も来てくれる？」

アイ「うん。参拝は朝の日課だからね」

コウ「よかった！ 私はこれから毎日ここにいるから、是非♪

じゃあね、また明日！」

アイ「あつ、ば、ばいばーい！」

……何か、不思議な子だったなあ。

いや、それよりもこの本……ええと、桔梗様の日記帳だっけ。

神様のだよ……？ こんなもの、私が持っていていいのかなあ。

それに、今はもう収まったけど、これを手にしたときのあの感覚は……

まるで額にもうひとつの目が出てきて、それで世界を見渡してるような、とにかく、上手く言い表せない不思議な感じだったな。

うーん。立花コウちゃん。桔梗様の日記帳。

そして、桔梗神社の解体……

ああ、頭ぐちゃぐちゃになりそう。

これ、私の脳みそで処理できる情報量じゃないよお。

私の通う鴨田山高校は、桔梗神社から田園を抜けて、

住宅街の方へ向かう途中にある小さな学校だ。

なぜここに来たのかというと、それは、桔梗神社取り壊しの理由を知るため。

担任の足柄先生は、よく授業中にこの町で起きた出来事とか、

無駄話……じゃなくて、昔話を長々と語ってくれるひとだから、

きっと鴨田山の地域事情に詳しいはず。

今は夏休みだけれど、補習や部活動のために校舎を開放しているから、

生徒の出入りは自由なんだよね。

アイ「先生、いるかなあ」

アイ「おはようございます。足柄先生いらっしゃいますか？」

教師「あら波多瀬さん。足柄先生なら、書庫にいるよ」

アイ「書庫……あつ、ここの向かいか。ありがとうございます。

失礼しまーす」

アイ「足柄せんせー？」

足柄「おお波多瀬。何だお前、今日も補習か？」

アイ「違いますよっ。っていうか今日もって！ 夏休み初日ですし！

あのですね、ちょっとお聞きしたいことがあって。

……桔梗神社が取り壊されるって、知ってますか？」

足柄「ああ、知ってるよ。又聞きした話だが、

何でも神主からの強い要望があったらしいな。

随分急だったが、本人立って工事関係者に話を通したそうだが」

アイ「どうしてそんなこと……？」

足柄「さてなあ。何か心境の変化でもあったんじゃないかな。

神職を廃業したくなったとか。それもなかなか珍しいことだが」

アイ「でも、神社を壊しちゃうことはないじゃないですか！

もし社を失ったら、桔梗様はどうなっちゃうんですか？」

足柄「何をそんなに熱くなってるんだ。外の熱にでもやられたのか？

確か今日は最高気温更新だとか」

アイ「茶化さないでくださいよ。あまりに唐突すぎて、気になったんです」

足柄「まあお前が心配する必要はないよ。遷宮といってな。

本殿を解体しても、御神体は他の神社に移されるのがふつうさ」

アイ「ほ、本当ですか！？ さっすが、歴史の先生！」

足柄「ほらほら、用が済んだらさっさと帰れ。俺は忙しいんだ」

アイ「珍しいですね、先生が忙しそうにしてるなんて」

足柄「感心したように失礼なこと言うんじゃないよ。

ああ、そうだ。今夏の桔梗祭は、最後の祭りになるだろうからな、なるべく参加するようにしろよ」

アイ「ふえ？ あッ……桔梗神社がなくなるから……ですか？」

足柄「まあ、あれは桔梗様を崇める祭りだからなあ。

恐らく夏祭り自体は今後も執り行われるとは思うが、

本当の意味での桔梗祭は、神社が存在する今年がラストになるはずだ」

アイ「……そっか。

何にせよ、助かりました。ありがとうございます！」

足柄「何その斬新なお礼！ 廊下は走るなよ！」

アイ「分かってます！」

遷宮……かあ。つまり桔梗様が死んじゃうわけじゃないんだね。

よかった、よかった。神社がなくなっちゃうのは寂しいけれど、ちよっぴり安心だ。

……あ。いつの間にか桔梗神社の前まで来てたんだ。

うーん。でもさ、何か妙だよね。

この神社、私が生まれる前からずっと建ってるらしいし。

そんな長い歴史に、いきなりピリオド打つなんてさあ。

取り壊されるのって、どんな理由なんだろう。

参拝客が昔より減ったとか？ それとも本殿の老朽化とか……かな？

歴史の長さはむしろ、古さの象徴でもあるもんね。

いつか壊されてしまうのは、仕方のないこと、なのかな……。

それって、何だか……寂しいね。

うーん……コウちゃんも言ってたけれど、

この日記帳、古ぼけて全然中身が読めないや。

これ、相当古いよなあ。今にもぼろぼろに崩れそうだし、文字は滲んでるし。

アイ「ううむ、どうにかして読めないものか……うああ中身が気になるー！」

メイ「もー、さっきからぶつぶつうるさいよお姉ちゃん。

いくら夏休みだからって夜更かししすぎ……って、何その汚い本」

アイ「あ、メイ。

こらっ、汚いって言わないの！ 大事な大事な宝物なんだから」

メイ「そんなの初耳だよ……。

わっ、文字すごい掠れてるし、ページボロッ！ 捨てちゃいなよ、もう」

アイ「だーめーなーの！ 確かにボロいけどさあ……」

メイ「そうそう知ってる？ 八十年代以前に造本された書物って、酸性紙を使うものが多いんだって。

それらはものの二十年で劣化して、こんな風にズタボロになっちゃうの」

アイ「へ、へえー。さすがは巷でうんちくの母と言われる妹……」

メイ「フフン。無知で無学なお姉ちゃんとは違うのです」

アイ「その生意気がなければ、もうちょい尊敬できるのになあー」

メイ「はいはい。いいから早く寝なよ。明日も参拝しに行くんでしょ？

信心深いアイお姉様」

アイ「むー。納得いかないけど、メイの言う通りだよ……。じゃ、おやすみ」

メイ「はいはい。おやすみ、お姉ちゃん」

メイの言う通りなら、これは八十年代より前に書かれたものなのかな？

桔梗様って、何歳なんだろう……？

っていうか、問題はそこじゃなくて……。

これに触ってから、何か……今まで見えなかったものが、

見えるようになった気がするんだよなあ。

一体それは何なんだろう。

ふぁーあ（あくび）……ねむい……もう寝よ……」

アイ「コウちゃん！ おっはよー！」

コウ「あつ。おはよう、アイちゃん。今日も参拝しに来たの？」

アイ「もつちろん。桔梗様に、私のなけなしの一円玉を捧げるのです……！」

コウ「うふふ。そんなに大変なら、別に毎日お賽銭入れなくてもいいんだよ？

桔梗様もきつと、お賽銭が欲しいわけじゃないし」

アイ「そんなものなのかな？」

コウ「うん。毎日会いに来てくれるだけで、とっても嬉しいよ」

アイ「あははは。まるでコウちゃんが桔梗様みたいだね。

あ、ところでさ、どうして毎日ここにいるの？」

コウ「この社の立派な姿を、目に焼きつけておきたいなって。

生まれたときからあった神社がなくなるのは、やっぱり寂しいからね」

アイ「そっか。さすがは神様に仕える巫女さんだね。

あっそうだ！ 昨日学校の先生から聞いたんだけど、

神社は取り壊しても御神体は別の土地に移すんでしょ？

そう、遷宮！ 遷宮だよ！

私、てっきり桔梗様がいなくなっちゃうかと思ってた！」

コウ「……遷宮には、私もついていくんだ。

だから、アイちゃんとは離れ離れになっちゃうね」

アイ「えっ。そうなんだ……

……だったらさ、遊びにいこうよ！」

コウ「えっ？ 遊びにつて……？」

アイ「コウちゃん、その制服つて、この辺りの学校じゃないでしょ？

鴨田山のこと、たくさん教えてあげるから！ ほらほら！」

コウ「えっ、ちょっ、アイちゃん！」

コウ「えっと、ここは……？」

アイ「相模じいさんの駄菓子屋さんだよ。

ここも桔梗神社みたいに、昔からあるの。」

よくみんなで駄菓子買いに来て、おまけしてもらっちゃったりして……」

コウ「そうなんだ。何がオススメなの？ このお店」

アイ「おっ、興味津々だねえ。

ふふ、このチーズおかきは絶品だよ！

ひとつ買ってあげるね！ すみませーん！ 相模じいさーん！」

相模「おお、アイちゃんかい。おや？ 今日美人さんも連れてるねえ」

コウ「こ、こんにちは。美人だなんて、そんな……」

アイ「うんうん。コウちゃんすっごく綺麗だもんね」

コウ「やああ……そんなこと、ないから……」

相模「ほっほ。いつものやつでいいのかい？」

アイ「はい！ 二つくださいな！」

相模「はいはい。ちょっと待ちなさいね」

コウ「アイちゃん、本当に常連さんなんだね」

アイ「まあね！ 何せ田舎だからさあ、

娯楽施設がないっていうか、目につくお店が少ないんだよ」

コウ「私は静かで良いと思うよ。

……私の引越先なんて、ここよりもずっと田舎だと思うし」

アイ「ええッ？　ここより田舎って……もはや自然だよ。野生だよ！」

コウ「ひとの来ないようなところにするって、神主さんも言ってたから」

アイ「うーん。神主さんの決定なら、どうしようもないよねえ。

……この夏はうんと遊ぼう？　田舎の遊びの予習にもなるし！

鴨田山にたくさん思い出残していつてよ！」

コウ「うん。ありがとう。アイちゃんって、優しいんだね」

アイ「そうでもないよ。」

目の前で寂しそうにしているひとがいるんだもん。

放ってなんかいられないって」

相模「はいお待たせ。チーズおかき二つね」

アイ「わっ。ありがとう！　はい、お代ね！」

相模「まいど。それと、これはそちらの美人さんと分けなさい。おまけだよ」

アイ「おおおっ、これは……ちよっぴり高い金平糖っ！」

コウ「ええっ。そんな、悪いですよっ」

相模「いいから、いいから。しょんぼりしたときは、

甘いもの食べれば元気になるもんさ」

コウ「あ……ありがとうございます」

アイ「よかったね、コウちゃん！　ありがと、相模じーさん！」

相模「ほっほ。またおいで」

コウ「ふう。おいしかった……。

ごめんね？　飲み物まで買ってもらっちゃって……」

アイ「そんな謝らなくていいってば。

お財布忘れたことなんて、私だって何度もあるし」

コウ「鴨田山のひとって、みんな優しいな。何だか、心が温くなるね」

アイ「えへへ。この町の魅力、少しは伝わったかな？」

コウ「うん。アイちゃんのおかげでね」

ところで、今どこに向かっているの？　林道に入って結構経つけど……」

アイ「ふふ。それはねえ……ひ・み・つ！」

コウ「えー？」

アイ「ついてからのお楽しみ！　もうちょっとだからね」

コウ「う、うん」

アイ「ついたつ。さ、お待ちかねだよ！　じゃーん！」

コウ「わっ。な、なに？　イスとか、カーテンとか……色々ある……！」

これ、草のベッド？　こ、この、職人さんみたいなかだわり感……！」

アイ「えへへ。ひ・み・つ、って言ったでしょ？

ここは、私の秘密基地でーす！」

コウ「すごい……！　これ、アイちゃんひとりで作ったの？」

アイ「うん！　中学の頃から、地道に集めたんだ！

不法投棄されたゴミとか、家で使わなくなった家具とか……

ふふふ。名付けてリサイクル・エコ・アイハウス！」

コウ「語呂が悪いけど、偉いね。環境に優しい秘密基地なんだ」

アイ「ごろがわるい！？　そんなあ、一生懸命考えたのに……」

コウ「あつ、そ、そんなつもりじゃ……」

アイ「なーんて、じょーだん！　えへへ」

コウ「も、もおお！　アイちゃん！」

アイ「まあまあ、くつろぎたまえよ立花殿。

このイスなんて、耐久性抜群で座り心地サイコーの——ぎゃっ！」

コウ「ひやああつ！　アイちゃんっ大丈夫！？」

アイ「いっつー……！　うへえ、このイス、ガタがきてたみたい……」

コウ「全然耐久性なかったね！？　ああつ、しかも手から血が出てるよ！」

アイ「えっ？　わっ、本当だ。切っちゃったみたい」

コウ「ちょっと、手貸して！」

アイ「うん？　絆創膏でも持ってるの？」

コウ「それはないけど、こうやって……（したでなめる）」

アイ「ひゃっ！」

コウ「唾液をつけておけば大丈夫だから。ごめんね、汚いけど」

アイ「い、いや、ありがとね。……わっ、すごい、血が止まった！」

コウ「もう、気をつけないとダメだよ？」

アイ「コウちゃん、すごいね。まるで女神様だよ」

コウ「やめてよ、恥ずかしいから……」

アイ「えっへへ。さてさて、気を取り直して遊んじゃお！」

コウ「うん！　はしやぎすぎないようにね？」

アイ「わかってるうー」

アイ「じゃあねー！　また明日ー！」

コウ「うん！ バイバーイ！」

……ふうー。今日も楽しかったあ。

コウちゃんつてば、優しいし面白いいし、あー、ずっと一緒に遊んでいたいなあ。

あ……そっか。神社が解体されたら、もう、コウちゃんとは会えないんだ。

うう……それも寂しい。どうしよう。今年はいつもの夏より楽しいけれど、

終盤にはたくさんの寂しさが待ち構えてるんだね……。

はあ。

桔梗神社、行ってみよう。

ついた。今日も変わらず、階段の下から見上げる立派な鳥居が、

まるで町を見守ってるみたい。……あの鳥居も、なくなっちゃうんだろうなあ。

アイ「どうにかなればいいのにな。神社の解体……」

クロ「ほう。憎き桔梗もいよいよ窮地か。ざまあないな」

アイ「うわっ！ だ、だれっ？」

クロ「おや？ 貴様、私の声が聞こえるのか？

……いや、見えるのか？ 私の姿が」

アイ「見えるし聞こえるけど……そのお面は……狐？

それに黒い袴……何かの仮装ですか？ ハロウインはまだ先ですよ？」

クロ「ああ、これか。ちと顔を見られるのが苦手だね。

仮装じゃない、これが私の本来だ」

アイ「へえ……四六時中そんな恰好で出歩いてるんですか」

クロ「何だその憐れむような目は。

大体、何故ただの人間に私の姿が見える？

……ん？ 何だ。何か面白そうなモノを持っているようだな」

アイ「え？ あ……これ？」

クロ「それは……人間の持つべきモノではないぞ」

アイ「ええ？ 別にいいじゃん！ さっきから人間、人間つて、

あなたは人間じゃないっていうのッ？」

クロ「私の名はクロウリ。

鴨田山の守り神、桔梗にあの神社を追放された……しがない妖さ」

アイ「あ、あやかし……？」

クロ「だが、桔梗も神としての力を失いつつあるようだな。

ははっ。愉快痛快だ。私を辱め、陥れ、その挙句……

いや、兎にも角にも清々しい気分だ。

あの桔梗が陥落する瞬間を見れないのは、ちと残念だがね」

アイ「ちよつと！ 何でそうひどいことばかり言うの？

第一妖なんて、いるわけないし！」

クロ「では貴様は、桔梗は存在しないモノと思ってるのか？」

アイ「それは……いると思ってるよ」

クロ「ならば妖がいても何もおかしくなからう。

現に、目の前にこうして立っているではないか。

貴様の持つそのおかしなポロ冊子のおかげで、
貴様はひとならざるモノを視認する力を会得しているのだ」

アイ「……うん。何となく納得はいく……けど。

これ、そんなすごい力があるんだ」

クロ「どこで手に入れたかは知らんが、早々に手放すことだな。

人間が神や妖と関わったところで、何の利益もない。

むしろ、理不尽な不運や不幸を呼ぶばかりさ。私がそうだったようにね」

アイ「ねえ。クロウリさん、だっけ？ 何かさっきから自分が被害者だあ、

みたいな話ばかりしてるけど、本当にそうなの？」

クロ「何だと？」

アイ「ほら、自意識過剰？ じゃなくて、被害妄想？

全部あなたの勘違いかもしれないでしょ？

桔梗様から神社を追放されたって言ったけど、

何か悪いこと、しでかしたんじゃないの？」

クロ「……何も知らない小娘が、勝手な妄想をぐだぐだ吐き連ねおって。

勘違いなものか。桔梗は私を裏切ったのだ。

今でも私は、神社への立入を許可されていない。

神社が解体されれば桔梗の力は失われ、足を踏み入れることもできるが、
それでは後の祭りだ。私は奴の霧消する瞬間を見たいのだ。

だのにあの輩、最後まで姿を隠し、私に恥をかかせ通すつもりらしいな」

アイ「……一体、過去に何があったの？」

クロ「貴様に話す義理はないさ」

アイ「あつそ。別に、私もそこまで知りたくないけどね。

あなたみたいなのうじうじと愚痴ばかり言う人、大っ嫌い。

どうせ女の子にもモテないんでしょつ、ばーか！」

クロ「よくもまあ妖相手にそこまでデカイ口を叩けるものだ。

ひとつ言ってやる小娘。私は、桔梗と婚約していたのだ！」

アイ「……そうなの？」

クロ「だが奴は裏切った！ 私を神社から追放した！

それから二度と顔を合わしてやってくれない！ 何日、何か月、何年、何十年、

数え切れぬ時を待っても、私はここで、神社へ繋がる階段の底で、

あの鳥居を見上げることしか許されない！

何か、文句があるか？ 言ってみろ、小娘！」

アイ「私もひとつだけ……いや、ふたつだけ言ってあげる。

桔梗様は、そんな神様じゃない！ きっと何か理由があるんだよ！」

クロ「ほう？ 奴と顔見知りですらない人間が、

いけしやあしやあとそんな御託を並べられたものだな」

アイ「じゃあ、あなたは……もしも桔梗様とあなたの立場が逆だったら、

何の理由もなく、彼女を突き放すの？」

クロ「……貴様の声は、耳障りだ。即刻、立ち去れ」

アイ「ふーんだ。

……、もう一度、よく考えてみなよ。

クロウリさん、桔梗様に拒まれたことだけに目を奪われて、肝心なことが見えてないんじゃないのかな」

クロ「去れと言っておろうが……！」

アイ「はいはい。もう、変なのに捕まっちゃったなあ……」

クロ「……………桔梗……………俺は……………」

八月十五日。あの妙な妖と出会ってから、三週間ほどが過ぎた。

コウちゃんには、その出来事を話していない。

怖い思いをさせてしまいそうだから、黙っていたんだ。

それと、神社解体の件についても、私とコウちゃんの話題には上がらなかった。

なるべくそれを思い出さないよう、お互いに遠慮していたんだと思う。

だって、神社がなくなる時……それは私達の、別れの時だから。

コウちゃんと出会ってから今日まで、毎日一緒に遊んだ。

駄菓子屋さんに行ったり、川辺で水遊びしたり、秘密基地で過ごしたり、

普段遊ぶ友達との誘いを断ってまで、彼女と同じ時間を過ごした。

そして、楽しい時間の経過は早いもので……

いつの間にやら、桔梗祭が、明日に迫っていた。

コウ「あの、アイちゃん」

アイ「ん？ どうしたの？」

コウ「えっと……明日、ね……」

アイ「あ！ それ私から誘おうと思ってたんだあ。

コウちゃん。明日の桔梗祭、一緒に回ろうよ！」

コウ「え？」

アイ「担任の先生いわく、桔梗祭って今年が最後なんだって。

神社の境内にばあーって屋台並んでさ、ヤグラも建てて、音頭踊って。

まさに夏の一大イベントだし、二人でならとっても楽しいと思うんだ。

……ダメかな？」

コウ「ご、ごめんねアイちゃん。

お祭り中は、巫女としての仕事があるから……

せっかく誘ってくれたのに、本当にごめん！」

アイ「……うん、気にしないで。そうだね、コウちゃん忙しいもんね」

コウ「ごめん。ごめんね。お祭りが終わったら、会いに行くから……

その……片付けが終わるまで、境内で待っていてくれる？」

アイ「うん！ いつまでだって待ってるよ！

あつ、それで、さっき何を言おうとしたの？」

コウ「えっと。あのね、お祭りの翌日には、

もう解体工事が始まって、神社に入れなくなっちゃうんだ……」

アイ「えっ。……うん。そっか」

コウ「だからね、色々兼ね合いがあつて、解体当日にはもう、

アイちゃんに会えなくなっちゃうの。

だから、会えるのは、明日の夜が最後なんだ……。

あまりその話をしたくなくて、今日まで伝えられなかったけど……

お、怒ってない？」

アイ「怒るわけないよー。コウちゃんつてば、本当に優しいんだから」

コウ「……ごめんね。本当にありがとう」

アイ「えへへ。どういたしまして！」

……その日、私とコウちゃんの会話は、弾まなかった。

二人で、ぼーっと遠くを眺めて、やがて日が暮れて、私は家に帰った。

アイ「あー……もう、何か変な感じいー」

何とも言えないムカムカする気持ちに苛まれて、ベッドに寝転んで……

ふと思いついて、桔梗様の日記帳を開いてみた。

『七月二十日。立花コウちゃんという、不思議な子に出会った。

神社の解体を知って、大ショック！ でも、御神体は遷宮されるから、
一安心だ』

……え？

これ……私の字？ しかもこの内容、コウちゃんと初めて出会った時の……

私、こんなの書いた覚え……ないよ？

アイ「ま、まさかモデルさんですかっ？ 見慣れない制服だけど！」

コウ「ち、違います！ 私、この神社の巫女です。立花コウっています」

アイ「へえ、巫女さんなんだ。コウちゃん……名前も綺麗だね」

コウ「うえっ。あ、ありがとう。……あなたの名前は？」

アイ「波多瀬アイカだよ。アイって、名前で呼んでくれると嬉しいな」

コウ「え、ええと……アイ、ちゃん……？」

アイ「うんうん！ コウちゃん♪」

コウ「……何だか恥ずかしい」

わわわわっ。これ、日記の内容が……脳内に再現されてる！ 映像つきで！
じゃ、じゃあ、もしかして次のページも……

『七月二十一日。コウちゃんと駄菓子屋さんに行った。

チーズおかきを二つ買ったら、なんとコウちゃんの可愛さに、
相模じいさんが高い金平糖をおまけしてくれた！ うらやましー』

うわあ。目を離そうっ。また回想が始まっちゃう。

でもすごいこれ……そっくりそのまま、あの日の出来事が思い出せるんだ。
なにこれなにこれ、不思議だけど、ちょっと怖い……。

えっと、じゃあ、その前のページは……？

前に見た時は、ページがボロボロだし文字も霞んで読めなかったけど……

『八月一日。』

今日も、あのひとが来た。

苦しくて、切なくて、顔を見られない。ああヒイラギ、それ以上、私を見つめないで』

な、何だろう、これ。桔梗様の字なのかな。

『八月十日。』

あのひとは、私のために、私だけのために、

ひとから、ひとならざる者へと身を落とした。

なぜ、どうして、そうまでして私を追い求めるのか。

愛しい。あなたが愛しい。

しかし、私は、あなたと結ばれてはならない。

これは、常世のしきたり』

『八月二十二日。』

八百万の神々が、あなたを奈落へと突き落とした。

真実は、永遠に伝えられぬであろう。

お赦してください。罪深き私を、お赦してください』

『九月一日。』

我が愛を、せめてこの地に。

たったひとり。ヒイラギのために。

桔梗の花は、枯れ果てた』

クロ「待ってくれ、桔梗！ 何故俺を拒む！」

桔梗「駄目っ、駄目なの、ヒイラギ！ 来ないで！

もう私に会っては駄目っ！」

クロ「俺の愛を、受け入れてくれたじゃないかっ！ 桔梗おっ！」

神々「何とも卑しい外道めが。まるで桔梗の花を喰らうハムシの如し醜態。

今日から貴様はクロウリだ。ヒイラギの名は我らが貰い受けようぞ。

去れ、クロウリ！ 二度とその姿、この境内に晒すでない！」

クロ「うッあ——」

……今の、は……もしかして。

メイ「お姉ちゃん、お友達から電話だよー。桔梗祭、一緒に行かないかってー」

アイ「あっ、う、うん！ 今行くから！」

……桔梗の花は、枯れ果てた。

それって……。

今年の桔梗祭は、結局、近所の友達と一緒に回ることになった。

皆から、夏休み前半は何してたのーと質問攻めにあっただけど、

旅行だなんだって適当に誤魔化しておいた。

コウちゃんとの関係は、秘密なの。どうしてかって聞かれると、

答えに困っちゃうんだけど……何だろうね。おとぎ話みたいにな、

うっかり喋っちゃったことで、それが消えてしまうような……

そして、二度と戻ってこないような、そんな気がしたんだ。

アキ「ほらほら、恒例の金魚すくい対決しようよ！ 一番とれた数が少ない人、

みんなに林檎飴をおごるんだぞー！」

アイ「うええ！ 私がそれ弱い知ってるでしょ！」

アキ「聞こえませんかあ。」

今日まで私たちの誘い蹴っ飛ばしてきた罰だよ、ばーっ！」

アイ「もおお！」

ミコ「早く行こ？ アイちゃん」

アイ「ううう、分かったよう。……、……げええ！」

ミコ「はいアイちゃんの負けー！」

アイ「ひう……鬼い。うう、金欠なのに……」

アキ「まあまあ。なけなしの林檎飴は、しっかり味わってやるからさー」

アイ「調子いいこと言って……。買ってくるから、ちょっと待ってなさい！」

二人「はぁーい」

アイ「ん？ あれは……足柄先生？ おーいつ、先生えー」

足柄「波多瀬か。どうだ、最後の桔梗祭。楽しんでるか？」

アイ「ええ、まあ。」

あの、どこかでコウちゃ……いや、巫女さん見ませんでした？」

足柄「巫女お？ おいおい、桔梗神社に巫女なんていないぞ」

アイ「え？ でも」

足柄「ここは神主一人で切り盛りしてるからな。」

……おや？ さてはお前、まーた金魚すくいに負けたな？」

アイ「う、うるさいですね。別にいいじゃないですか」

足柄「はっは。ま、あまりはしゃぎすぎないようにしろよ。」

って、さっそく怪我したのか、その手」

アイ「違いますー！ この前転んじやった時の傷ですから！

じゃ、すみません。林檎飴買わなきゃなので、失礼します！」

足柄「……何だあいつ。様子が変だな……？」

アイ「巫女さんが、いない……でも、コウちゃんは……

……これって、もしかして……」

ミコ「アイちゃん！ 花火打ち上げるってさ！ ほら早く早く！」

アイ「えっ？ あっうん！」

アキ「そらっ。林檎飴いただきーっ！」

アイ「ああっもう！ もっとありがたみなさいよー！」

アキ「おいしーおいしー。さすがアイの買った林檎飴だー」

アイ「棒読みだね……。――わっ」

ミコ「おお、綺麗だあ」

アキ「今年はいつもより気合い入ってる感じするね。最後の桔梗祭だからかな？」

アイ「……そうだね」

アキ「それじゃっ、また明日ねー！」

アイ「うん、ばいばーい！」

……さてと、神社に戻らないとね。コウちゃんが待ってるはずだから」

クロ「最期の桔梗祭も灯りが消えたか。さぞ派手な祭だったろうな」

アイ「あっ……クロウリさん」

クロ「まだそのいかがわしい書物を持て余していたか。

まったく人間とは、忠告を聞かん生き物だな」

アイ「あなたがそれを言う？」

クロ「何？」

アイ「あなたは、ヒイラギという名前の人間だったんだよね」

クロ「ッ！……知らんな」

アイ「全部、書いてあったよ。これにね」

クロ「それは……もしや、桔梗の……日記帳なのか？」

アイ「うん。私も最初は中が読めなかったけど、あなたの言ったように、これには不思議な力があったんだ。

私の思い出を、断片的に記録していくの。

いつの間にか、夏休みの日記が出来上がった。そしたらね、桔梗様が昔書いた日記の内容が、読めるようになってたんだ」

クロ「貴様の所有物となった証だな……。

そこに、私を貶す内容が書かれていたということか。

桔梗めが、どこまで陰湿な神なのだ」

アイ「違うよ！ ここには、あなたを待つ桔梗様の想いが書かれてたんだよ！
桔梗様は、自分の意思であなたを追い出したわけじゃない！
八百万の神々がヒイラギを奈落へ落としたって、書いてあったもん！
真実は、永久に伝えられないだろう……って！」

クロ「見え透いた嘘だ」

アイ「嘘じゃない！ 私が嘘つく理由なんて、どこにあるの？」

クロ「わめくな。貴様の甘言など……信じられんよ。証拠も何もない。
その日記帳は私が読めるものではないのだからな」

アイ「信じられないなら、神社を見てみるといいよ。

この階段を上って、桔梗神社の……その最後の姿を、見てあげて」

クロ「私は追放された身だ。境内に立ち入ることはできない。

その階段にすら、私は足を延ばせないのだ」

アイ「そう思うなら、ずっとそう思っていればいい。」

日記の最後の一文は、『桔梗の花は枯れ果てた』、だった。

桔梗様は、死んじゃったんだよ。

でもね、鴨田山の守り神様は……あなたへの愛を、

あの神社に残してくれたみたいだよ。見に行かなくていいの？」

クロ「もう、いい。それ以上、貴様の話を聞きたくない。

放っておいてくれ。私を、ひとりにさせてくれ……」

アイ「決心がついたら、上がっておいでよ。待ってるからさ」

アイ「……私ね、ヒイラギさん。

桔梗様の残してくれた愛が何なのか、分かる気がする。

ずーっと気づかなかったけど、この日記帳のおかげで、ね」

アイ「あれれ。もう皆、帰っちゃったんだ？」

コウ「片づけも終わったみたい。ごめんねアイちゃん、夜遅くになっちゃって。

花火、すごかったね。一緒に見れなかったのは残念だけど……」

アイ「そうだね。私も一緒に見たかったなあ。

……ねえ、コウちゃん。懐かしいって感覚、不思議だと思わない？」

コウ「へ？ どうしたの、急に」

アイ「ふと思ったんだ。懐かしいって、心の中にあるもので、

目に見えたりするわけじゃないよね。」

ひとによって、色んな思い出があるし、何を懐かしいと思うか、それもひとによってバラバラなんだよ」

コウ「アイちゃん……？」

アイ「この日記帳は、そんな懐かしい思い出を、

目に見えるカタチで記録してくれる。

まるで記憶のカケラを拾い集めるみたいに、ひとつひとつ、

どんなに小さなことでも……。

分かったんだ。どうしてコウちゃんがこれを渡してくれたのか。

そして、コウちゃんが何者なのか。

この日記帳を見るたびにね、コウちゃんと過ごした思い出が、

頭に浮かび上がるの。照れた顔も、笑った顔も、全部。

……それってさ、つまり、コウちゃんは——」

コウ「その先は、言わないで。アイちゃんが分かっているなら、

口に出さなくても、ちゃんと伝わっているから」

アイ「……お礼を言いたいな。私にこんな素敵な贈り物をしてくれて、

ありがとう。

そうだ、もうひとりいるんだよ。あなたにお礼を言いたいひと」

コウ「え？」

アイ「ほら、隠れてないで出ておいでよ」

クロ「……どこまでも、お節介な小娘だ」

コウ「あなたは……？」

アイ「このひとはねえ、桔梗様のお婿さん！」

クロ「なッ」

コウ「えっ……！ あ、あなたが……？」

クロ「お、おいつ！ その言い方はやめろ！」

アイ「えー？ ちがうのお？」

クロ「ち、違うとか、そういう話じゃなからうが」

アイ「わー、照れちゃって！ 可愛いところもあるんだね」

クロ「黙れ！ ……ちっ……懐かしい香りだ。そうか、貴様が、桔梗の……。

私がこの地に足をついているということは、やはり、桔梗はもう……」

コウ「……お母様……先代桔梗には、子がいませんでした。

死期を悟った先代は、自らの肉に刃を入れ、滴る血潮は、

私という新しい神を生み出したのです。

彼女は死に際に、私に言いました。『あのひとが、きっと来るから』と。

私には理解できませんでしたが……そっか、あなたが……」

コウ「……お父様」

クロ「なっ……何を？」

コウ「私は、あなたと桔梗の愛によって、生まれたのです。

あなたが、私のお父様ですよ」

クロ「……。やれやれ桔梗め、最後の最後で洒落た置き土産というわけか。大して驚きませんがね。はっはっは……」

クロ「波多瀬……といったか。全て君の言う通りだったな。

俺は……馬鹿だ。馬鹿にも程がある。君には悪い事をした……」

アイ「そんなことないですよ。

あなたはきっと、長い孤独に支配されていただけだと思うから。

でも、これでもう大丈夫だね。コウちゃんと一緒なら、

どこへ行ってもひとりじゃないし！」

クロ「そうしたいところだが……どうやら、お迎えだ」

アイ「え？」

コウ「あっ！」

アイ「わっ。ど、どうしたのッ？ 変な光が……ヒイラギさんを包みでる」

クロ「俺はもはや、ひとでも妖でもない、成仏し切れていない怨霊なんだ。

無念が、願いが成就されたならば……あとは、ただ消えるのみさ」

コウ「お、お父様……！」

クロ「桔梗。君ならきっと、立派な守り神になれるだろう。

何せ、あいつの娘だからな。

最後にひとつだけ、クロウリでなく、君の父親として伝えさせてほしい。

……生まれてきてくれて、ありがとう」

コウ「……お父様。逝ってしまったわ……」

アイ「とっても優しいお父さんだね。コウちゃんの性格は、あのひと譲りかな？」

コウ「そうなのかな……？ でも、何だか嬉しいな……」

アイ「コウちゃんが日記帳を渡してくれなかったら、

ヒイラギさんもコウちゃんに会うことができなかったんだよね。

桔梗様の想いがコウちゃんに受け継がれて、知らず知らずのうちに、ヒイラギさんを招き寄せたのかもしれないね。

あのひとは消えちゃったけど、でも、

この日記帳に、私の記憶のカケラとして生き続けるよ、きっと♪」

コウ「そうだね。

私もいつか、アイちゃんの懐かしい記憶のカケラになれば、嬉しいな」

アイ「それはお互い様だよ」

コウ「うふふ。……ね、アイちゃん」

アイ「ひゃっ。コ、コウちゃん？」

コウ「本当は離れたくない……ずっと一緒にいたいよ」

アイ「……もう、甘えん坊さんだね。大丈夫だよ。ここでお別れでも、

私達はずーっと、記憶の中では一緒だから。ほら、ね？

大丈夫……大丈夫、だから……」

コウ「ごめん、ね……私、守り神なのに、強くないといけないのに」

アイ「そんなこと、ない。誰かのために涙を流せるコウちゃんは、

立派な神様だよ。ひとの心を持つてる、やさしい神様なんだよ」

コウ「アイちゃん……ありがとう」

アイ「こちらこそ……。えへへ、コウちゃんったら桔梗の花の香りがするよう。

このままこうしてたら、私も桔梗様になっちゃいそうだね」

コウ「もう……最後の最後で恥ずかしいこと言わないで……」

アイ「ごめんごめん。ちょっとユーモアを効かせてみました」

コウ「ふふっ。やっぱりアイちゃんは、アイちゃんなんだなあ」

アイ「あーっ、それってどういう意味！」

コウ「なんでもないです」

アイ「もー！ いじわる！」

コウ「あははは」

アイ「わっ！ コウちゃんの身体……光って……まさか」

コウ「……もう、日を跨ぐ時間、かな」

アイ「えっ？ う、うん、零時一分前」

コウ「もう、行かなくちゃ」

アイ「ッ！ コウちゃん……！ え、えっと、事故とかには気をつけてね！
夜はちゃんと歯を磨いて寝るんだよ？ あとは、あとは、えーっと」

コウ「アイちゃん。」

……優しく愛しい、私の親友。
大好きだよ……」

アイ「コウちゃん……わ、私もっ！ 私もコウちゃんの事、大好きだよ！」

コウ「ありがとう。……さようなら」

アイ「……行っちゃった。」

あ、好き嫌いでしないで食べてね、って、言い忘れたなあ。
あはは……」

翌日の早朝から、桔梗神社の解体工事が始まった。
取り壊す様子を見に行こうとしたけれど、
階段の前にバリケードが設置されていて、その願いは叶わなかった。
地元のひとたちが結構集まってきていて、その中には、足柄先生もいた。
やがて先生は、こっそりと人だかりを抜け出して……肩を震わせ、泣いていた。
夏が終わって、工事も終了して、桔梗神社は、更地となった。
鳥居も灯籠も本殿も、跡形もなく消え去った境内。
桔梗様の痕跡は、一切残ってなくて……

メイ「おねーちゃん、そこにいるんでしょー！

午後からお友達とカラオケ行ってくて言ってたじゃん！
私も行くことになったからさあ、早く準備して行こー！」

アイ「家で待っててー！ すぐ行くからー！」

アイ「……ふう。さてさて、いっちゃ歌いますかぁー！」

立花コウちゃん。

彼女と過ごした日々は、ほんの少しだけ過去の事なのに、夢のような、
遠い昔のような、ひどく懐かしさを感じる記憶になってしまった。
この夏に起こった、ちよっぴり不思議な体験。

それは、時が過ぎてバラバラになってしまっても、
懐かしのカケラを拾い集めれば、

まるで昨日の出来事のように思い出せるはずだ。

それを手伝ってくれる桔梗様の日記帳が、ここにある。

最後のページには、私の親友の、ちよっぴり寂しげな笑顔が、
いつまでも……残っていた。

……おやすみなさい。愛する君へ。

5. 黒崎愛

……ふう。……あ、寝顔かわいい……。ぐっすりだね、よかった。
あ、どうしよう、まだ眠くならないや……。

ん〜……。……わあ、もうこんな時間だったんだ。

よいしょ……。ふふ、広縁(ひろえん)って落ち着くなあ。

……さっきまでこのひとつたら、あんなにはしゃいで、景色すごいよ、って、
子どもみたいだったな……。うふふ。

おやすみなさい。そんな一言がこうして言えるの、幸せだな……。

……あるところに、地味でぼつちなクラスメイトがいました。

友人もいない。作る気もない。趣味は読書で、取り柄も特技もない。

言葉どころか、目線ひとつ交わした事のない間柄。

沈黙を破った一言は、彼女の人生をがらりと変えてしまうものでした。

頭の中で思う事。それを口に出す事。

どちらも、ひとという生き物なら、皆何気なくやっているけれど、

口に出す方は、とてもとても……勇気が要る事だと知りました。

そして、幸せを知りました。

しかし。

クラスメイトは、やさしさに甘え始めて、それなしでは生きてゆけず、

幸せをはき違えている感覚になる日が増え……悩みが芽生えて。

でも、ああ、もらった勇気は、

いつの間にやら自分のものになっていたのでしょうか。

彼女は、歩幅を共にする決意を。それを口に出す勇気を見せました。

一歩先には、互いの笑顔が咲いて、たどたどしい指先が触れ合って。

不器用に温め合いました。本当の幸せを手探りするように……。

それから、どれだけの月日が流れたでしょう。

彼女は、幸せの先にある幸せと共に在りました。

そして毎日毎日、考えるのです。

想いを重ねて、言葉を連ねて、何万文字という気持ちを伝えたとしても、

この一言には到底かなわないのだと。

ありがとう。

ありがとう。

今まで。そして、これからも。

ありがとう。

(終)